

# 岡山方言のイントネーションの記述に向けて — 疑問文イントネーションを中心とした予備的考察 —\*

み むらたつゆき  
三村竜之

室蘭工業大学  
m76tatsu@gmail.com

## 1 序

### 1.1 本発表の背景と目的

岡山県南部方言（以下、岡山方言とする）は、アクセントに関する研究は豊富である一方、イントネーションに関する研究は皆無に等しい。近年、日本語諸方言のイントネーションの実態が明らかとなりつつある一方で、岡山方言は未だにイントネーションに関する基本的な事実すら記述されていない。そこで本発表では、母方言話者である発表者の内省観察とインフォーマント調査によって得られた資料に基づき、岡山方言のイントネーションの実態について報告を行う。特に疑問文のイントネーションに焦点を当て、音調の型と意味の関係など疑問文イントネーションの諸側面を明らかにする。また、諸方言に関する先行研究が着目してきた種々の観点に基づき、岡山方言のイントネーションの類型論的な位置づけを試みるとともに、諸外国語との関連からも考察を行う。

### 1.2 本発表の資料

本発表で考察の対象とする「岡山方言」とは、広義には岡山県南部で使用される方言を指す。<sup>\*1</sup> 但し、沿岸部や島嶼部（地図の円で囲んだ箇所含む）は内陸部とは異なるアクセント体系を有しており（虫明 1954: 7, 1982: 76–77）、それに伴いイントネーションも内陸部とは異なる可能性があるため、ここでは県南部には含めないこととする。

本発表で引用する資料は発表者の内省観察とインフォーマント調査に基づくものである。発表者の内省観察により得られた資料を、インフォーマント調査（2016 年に実施）を通じて確認並びに修正・補足作業を行った。発表者並びに調査協力者<sup>\*2</sup>の情報を以下に記す：

(1) **発表者：**1976 年生（倉敷市亀山）。

12 歳から 18 歳まで岡山市<sup>いま</sup>（現：北区<sup>いま</sup>）に居住。  
父は高梁市<sup>たかはし</sup>旧川上郡、母は総社市<sup>しさわ</sup>穴栗の生まれ。  
祖父母との居住歴は無い。

**協力者：**KM 氏（女性）

1932 年生（総社市穴栗）。発表者の実母。結婚を機に倉敷市と岡山市に居住。県外での居住歴は無い。

**TM 氏（男性）**

1969 年生（岡山市）。発表者の実兄。2 歳から 18 歳まで倉敷市亀山に居住。埼玉県草加市（4 年）と広島県福山市（3 年）に居住後、岡山市北区今に在住。



\* 本発表は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果を報告したものである。

\*1 後述するインフォーマントの出生地並びに旧国（令制国）名に基づけば、本発表で扱う岡山方言は「備中南部（備南）」で使用される方言と位置付けることができよう。

\*2 インフォーマントとして尽力してくださったお二方にこの場をお借りして心より御礼を申し上げます。

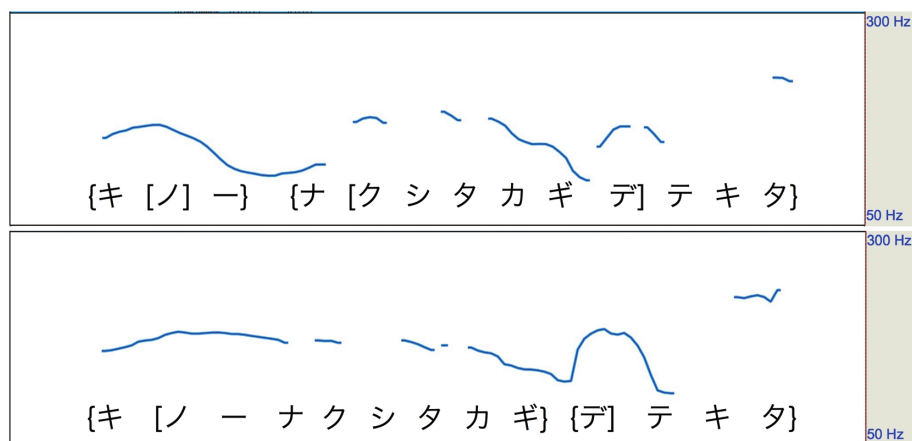


図1 「昨日無くした鍵が出てきた。」のピッチ曲線（上: 出てきたのが昨日; 下: 無くしたのが昨日）

インフォーマント調査では、木部 (2008) や前川 (1997) の例文を参考にして作成した標準語の文を岡山方言に直してもらおうという手法も用いた。なお、調査の一部始終はインフォーマントの許諾を得た上で録音した。

また、自然談話の資料として、国立国語研究所 (2004). 『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第14巻 鳥取・島根・岡山』も参考にした（1979年、小田郡矢掛町<sup>やかけちょう</sup>内田にて収録; 話者: 女性 1919（大正8）年生（収録時60歳）、男性 1918（大正7）年生（収録時61歳）; cf. p. 138, 152）。

### 1.3 先行研究

岡山方言は、虫明 (1954) や角道 (1984 など) を始めとして、アクセントに関する先行研究は少ない。一方、イントネーションに関しては、藤原 (1972: 67 など) が文末詞（終助詞）との関連で文末音調に関してわずかに触れているに過ぎず、それを除けば先行研究や調査報告は寡聞にして知らない。<sup>\*3</sup>

ちなみに、岡山方言のアクセントは、所属語彙に差異は見られるものの、東京方言と同じく下げ核の位置と有無により拍（モーラ）数+1個の型が区別される多型アクセント体系 ( $P_n = N + 1$  (Ivić 1970: 287)) である。

- (2) a. ハ] ガ<sup>\*4</sup>「葉が」、サ] メ「鮫」（標準語: ハガ=、サメ=）
- b. ナ] ツガ「夏が」、モミ] ジ「紅葉」（標準語: ナツ] ガ、モ] ミジ）

## 2 岡山方言のイントネーション

### 2.1 記述の枠組み

木部 (2008: 443) は、諸方言に適用可能な一般性の高い調査方法と記述の枠組みがイントネーションに関しては確立していないことを踏まえ、方言イントネーションを捉える共通の枠組みとして、(1) 句、(2) 句構造（フォーカスを含む）、(3) 文末の三つのレベルでの記述を提案している。本発表でもこの枠組みに基づき、(1) 句の音調と修飾構造（句の切り方）、(2) 文末音調に関して考察を進める。

### 2.2 句の音調と修飾構造（句の大きさ・切り方）

ここでの「句」とは、いわゆる東京方言に関して提唱されている「音調句」に相当するもので、上野 (2003: 62; 2002: 166) に倣えば「意味に応じて伸縮自在な長さを持つ一息に発音したまとまり」と規定できよう。この規定に基づけば、文を構成する語句同士の修飾構造の差異は句の大きさや切り方の差異として現れることが予想される。従って、ここでは、句の音調と修飾構造を合わせて扱うこととする。

<sup>\*3</sup> タルボット (1979) にはイントネーションという用語が散見されるが、全てアクセントの誤りである。

<sup>\*4</sup> 上野 (2002: 164, 171) に倣いアクセント核を「j」で、また無核であることを「=」で示す。

東京方言と同様に、岡山方言も句の切れ目は句頭における音調の上げによって示され、頭高型であれば一拍目が、中高型であれば二拍目以降が高くなる（但し、二拍目の自立度が低い場合は中高型であっても一拍目から高くなることもある）。また、句の大きさ（句の切り方）も東京方言と同様、意味内容に応じて比較的自由に決めることができる。具体例を以下に示す（‘↑’ で句頭の上げを、‘{ }’ で句を示す；前頁の図 1 も参照）：

- (3) 「昨日無くした鍵が出てきた。」  
 a. {キ [ノ]ー} {ナ [クシタカギデ] テキタ} 【出てきたのが昨日】  
 b. {キ [ノーナクシタカギクシタカギ] {デ} テキタ} 【無くしたのが昨日】

## 2.3 文末音調

### 2.3.1 疑問文以外の文

ここでは便宜上、いわゆる平叙文や命令文など、疑問文ではない文をまとめて扱うこととする。平叙文、命令文、感嘆文のいずれも文末には下降調<sup>\*5</sup>が現れる（‘↘’ で下降調を示す）：

- (4) a. キ [ノーナクシタカギデ] テキタ ↘ 「昨日無くした鍵が出てきた。」 (=3b))  
 b. [ハ] ヨーシネー ↘ 「早くしなさい。」  
 c. ヨ [ーユワン] ワー ↘ 「到底言葉になりません。」

なお、(4b) の命令文に丁寧な意味合いを付け加えると (5) に示した文となり、文末音調は下降調のままである：

- (5) [ハ] ヨーセ [ラレ]ー ↘ 「早くしてください。」

少なくとも文末音調に関しては、岡山方言には丁寧さとの相関関係（例：木部（1997: 249））は見られないようである。

### 2.3.2 疑問文

まず具体例を以下に示す（次頁の図 2 も参照）：

- (6) a. 疑問詞疑問文：  
 (i) キ [ノ]ー ナ [ニヲ (～ナ [ニュー] タ] ベタン ↘ 「昨日何を食べたのですか。」  
 (ii) ア [シタ ド [コエ (～ド [ケー] イ] クン ↘ 「明日何処に行くのですか。」  
 b. yes/no 疑問文：  
 (i) キ [ノ]ー [ナン] カタ ベタン ↘ 「昨日何か食べたのですか。」  
 (ii) ア [シタ クラシキ] イク] ン ↘ 「明日倉敷に行くのですか。」  
 c. 否定疑問文：  
 [ナ] ンモタベ] ンノン ↘ 「なにも食べないんですか？」

(6) から岡山方言の疑問文に関して次の二点が明らかとなる：i) 疑問詞の有無を問わず文末詞を用いて作り、「終止形＋ン」と「否定形＋ノン」の何れかの構造をとる；<sup>\*6</sup> ii) 文末の音調は疑問詞の有無や否定か否かを問わず下降調（非上昇調）である。<sup>\*7</sup>

岡山方言の疑問文の構造と文末音調を以下にまとめる：

- (7) 疑問詞疑問文：  
 文の構成要素（疑問詞含む）＋文末詞「(ノ)ン」＋下降調（非上昇調）  
 yes/no 疑問文：  
 文の構成要素（疑問詞無し）＋文末詞「(ノ)ン」＋下降調（非上昇調）

<sup>\*5</sup> これ以降用いる「下降調」（「上昇調」も同様）という用語は、必ずしも一拍内での音調の下降（あるいは上昇；いわゆる contour tone）を指すものではなく、複数の拍に渡る漸次的な音調の下降（上昇）も含む点に留意されたい。

<sup>\*6</sup> 疑問詞疑問文では文末詞を用いる代わりに動詞の假定形を用いることもあるが（「疑問詞の係結び」 cf. 虫明 1982: 100–101）、今回の調査では例は得られなかった。

<sup>\*7</sup> 隣県の広島方言では、疑問詞疑問文は文末が下がるが yes/no 疑問文は文末が上がるという（木部（2013: 23–24））。

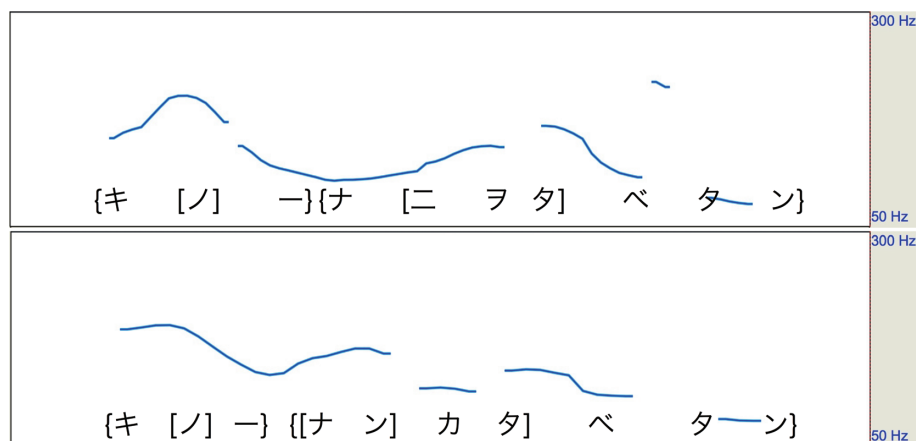


図2 疑問詞疑問文と yes/no 疑問文のピッチ曲線

## 2.4 疑問文の意味と上昇調(非下降調)

疑問文(質問を意図した発話)であるにも拘らず文末音調が上昇調(非下降調)をとる事例が現時点で三つ確認されている。まず第一に、何らかの理由により疑問の文末詞を欠く場合、文末音調は上昇調となる：

- (8) a. (i) キ [ノ] ー ナ [ニ ヲ (～ナ [ニュー] タ] ベ タ ↗ 「昨日何を食べたのですか。」  
 (ii) キ [ノ] ー ナ [ニ ヲ (～ナ [ニュー] タ] ベ タン ↘ 「【同上】」 (= (6a.i))  
 b. (i) ア [シタ クラシキ] イク ↗ 「明日倉敷に行くのですか。」  
 (ii) ア [シタ クラシキ] イク ン ↘ 「【同上】」 (= (6b.ii))

文末詞を欠くと平叙文と形式上の区別がなされないために、言うなれば文末音調を上昇調にすることで同音異義の状態を回避していると解釈することもできるかもしれないが、そもそも、文末詞が使用されない理由は現時点では不明である。また、容認度に年代差や個人差、性差があるかもしれない(発表者の内省観察では文末詞を欠いた疑問文は不自然であり、極めて標準語的な響きを感じる)。

第二に、対話の中で相手の発言が聞き取れず、例えば「はあ？」や「何が？」と問い返す場合には、上昇調(非下降調)をとることもある(発表者並びにインフォーマントのいずれの内省観察でも下降調も可；‘j’は拍内下降を指す)：

- (9) a. (i) (今年は雨が多かったですね。) [ナン] ガ ↗ (～[ナンガ] j) 「何が(多かったの)？」  
 (ii) (来年、岡山に行きます。) ド [コヘ ↗ (～ド [コヘ] j) 「何処へ(行くの)？」  
 b. 男性: ナンカ シモン タニガ オイー ユー テ イ ヨー タ ノー ケ サ ア ノ 【人名】 クンガ。  
 「なんか下の谷が多いと言っていたな、今朝あの【人名】くんが。」

女性: ナンガ? ↗ 「なにが？」

男性: ミズガ。「水が。」

(国立国語研究所 (2004: 153); 表記を一部改変)

東京方言の感覚からすれば「問い返し」が上昇調であることはおそらく至極自然であるかもしれないが、岡山方言は下降調をとることもあり、諸方言における「問い返し」の音調の実態がいかなるものか興味深い。

ちなみに諸外国語に目を向けても、「問い返し」の音調が下降調である言語は決して稀ではないと思われる：

### (10) アイスランド語\*8

a. *Ha?* [há: ↘] 「えっ? ・もう一度お願いします。」

b. *Hvað segirðu?* [kva(ð) séiɾðu ↘] 「何と仰いましたか？」  
 what say-you

cf. 英語: *Excuse me?* ↗ / *What did you say?* ↗ (牧野 (2005: 138); 表記は発表者のものに変更)

\*8 アイスランド語の疑問文の文末音調は、疑問詞の有無を問わず下降調である (三村 2016: 155)。なお、アイスランド語の資料収集は日本学術振興会科学研究助成金による資金援助を受けて実施した (課題番号: 15K16729)。

最後に、聞き手に念を押したり言い聞かせる場合、文末音調は上昇調をとる。文末詞を欠く場合もあるが、用いるとすれば「カ」である（「ン」も可か？）:

- (11) [エ] エ (カ) ノ 「いいですか？」  
cf. [エ] エン ヽ 「いいですか？【良いか悪いかを問う疑問文】」

純粋に「良い」か「悪い」かを問う疑問文の場合は規則的に下降調をとる点に注意されたい。なお、「念押し」や「言い聞かせ」という意図を伴えば、形式上は疑問文でなくとも上昇調をとりうると考えられる（例:【子供にこれ以上おやつがないことを確認させる意図を込めて】コ [レデサ] イゴデ ノ 「これでおしまいだよ。」）。



木部 (2013: 29 表 1) では、疑問詞の有無、文末音調の種類（（漸次）上昇/（漸次）下降）、文末詞の有無、疑問文を作る要素（文末音調と文末詞の何れか、あるいは何れも）の観点から、東京方言、鹿児島方言、北九州方言、福岡方言の疑問文のイントネーションを比較対照している。同様の観点を踏まえて岡山方言の疑問文をまとめると (12) の通り:<sup>9</sup>

(12)

方言	文末音調		文末詞の有無と種類
	疑問詞疑問文	yes/no 疑問文	
岡山方言	下降(非上昇)	下降(非上昇)	(ノ)ン
			無し【標準語風か？】
	上昇	上昇	無し/(ノ)ン【聞き返し】
			無し/カ/ン【念押し・言い聞かせ】
東京方言	上昇	上昇	無し【あるいは「の」】
鹿児島方言(古)	下降	下降	ナ/カ/ヤ/ケ
北九州方言	下降	上昇	無し【あるいは「ン」】
福岡方言(古)	漸次上昇	下降	ナ

### 3 今後の課題

以下に述べる四点が今後の課題として考えられる。まず第一に、調査方法の改善が挙げられる。本発表ではインフォーマント調査の際に標準語を方言に訳してもらう手法も用いたが、標準語の影響のためか本来の方言形が使用され難く（例: キニョー「昨日」、ノーナス「無くす」）、またインフォーマントによってはそもそも標準語を方言に訳すこと自体が著しく困難であった。可能な限り自然な資料を採取すべく調査方法の検討が急務である。

第二に、非疑問文も含めて文末音調の詳細な型の分類とその意味の特定が求められる。本発表では、便宜的に下降調と上昇調という二つの型に大別して考察を進めたが、それぞれの型の中で更なる分類はできないか、またその分類と意味（発話意図・内容）との関係はいかなるものか、更なる調査が求められる。

第三に、呼びかけのイントネーションの調査も必要である。

- (13) オ [ニ] ーチャ] ーン ヽ (、オカーサン キノーナ ニュータベタン カワカランワー。)  
「お兄ちゃん (、お母さん、昨日何を食べたのか分からないよ。)」

現時点では (13) に示した一例のみが確認されており(次頁の図 3 も参照)、今後、様々なアクセント型の語を用いた調査と分析が求められる。

最後に、イントネーションにまつわる世代差や個人差、性差も明らかにする必要がある。既に本論にて触れたよう

<sup>9</sup> 木部 (2013: 29 表 1) を基に発表者が作成した。なお、紙幅の都合上、鹿児島方言と福岡方言は新しい世代の変種は割愛した。



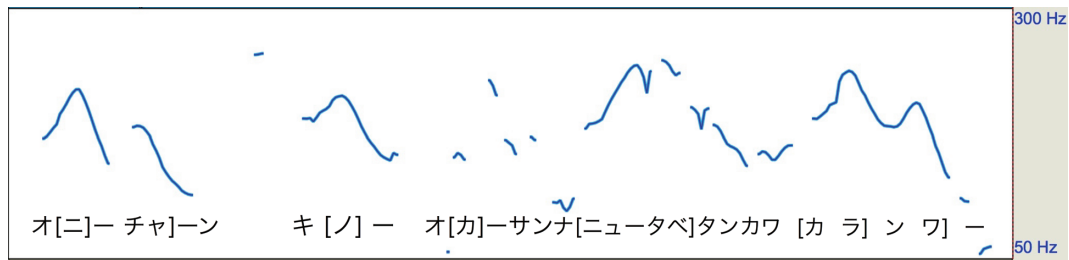


図3 呼びかけのイントネーションのピッチ曲線

に、問い返しの疑問文における文末音調や文末詞「ン」の使用に関しては年代差や個人差があると考えられ、その詳細の解明が求められる。また、発表者の内省観察では容認できないものの、インフォーマントの報告では文末詞「ン」を疑問文の返答にも用いることが可能であるという。<sup>\*10</sup>

- (14) a. ナ [ニ(〜ナ [ニュー]ノ) ミョーン \ 「何を飲んでいるのですか？」  
 b. (i) ビール (ノミョーンジャ) 「ビールです/を飲んでいます。」  
 (ii) ?\*ビールノミョーン \ 「【同上】」  
 cf. ビールノミョーン \ 「ビールを飲んでいるのですか？」

今後は多数の話者の協力を得て、文末詞「ン」の用法も含めた年代差や個人差に関する詳細な調査が求められる。

## 引用文献一覧（アルファベット順）

- 藤原与一 (1972). 「方言文末詞（文末助詞）の研究」. 『広島大学文学部紀要』 特輯号 2 号, pp. 1–95.
- Ivić, Pavle (1970). “Prosodic possibilities in phonology and morphology.” Eds., Roman Jakobson and Shigeo Kawamoto. *Studies in General and Oriental Linguistics Presented to Shirō Hattori on the Occasion of his Sixtieth Birthday*. Tokyo: TEC Company for Language and Education Research, Ltd., pp. 287–301.
- 角道正佳 (1984). 「分節音とアクセント (1): 岡山方言の分析から」. 『大阪外国語大学学報』 第 64 号, pp. 169–184.
- 木部暢子 (2000). 『西南部九州二型アクセントの研究』. 東京: 勉誠出版.
- 木部暢子 (2008). 「方言イントネーションの記述について」. 『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』. 富山: 桂書房, pp. 443–459.
- 木部暢子 (2013). 『じゃって方言なおもしろか』. 東京: 岩波書店.
- 国立国語研究所 (2004). 『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第 14 巻 鳥取・島根・岡山』 (国立国語研究所資料集 13–14). 東京: 国書刊行会.
- 前川喜久雄 (1997). 「アクセントとイントネーション —アクセントのない地域—」. 『諸方言のアクセントとイントネーション』. 東京: 三省堂, pp. 97–122.
- 牧野武彦 (2005). 『日本人のための英語音声学レッスン』. 東京: 大修館書店.
- 三村竜之 (2016). 「アイスランド語における文音調（イントネーション）の記述に向けて」. 『北海道言語文化研究』 第 14 号, pp. 147–158.
- 虫明吉治郎 (1954). 『岡山県のアクセント（その一）』 (岡山県方言の研究・第一号). 岡山: 山陽図書出版.
- 虫明吉治郎 (1982). 「岡山県の方言」. 『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』. 東京: 国書刊行会, pp. 58–101.
- タルボット, アラン (1979). 『岡山の日本語』. 岡山: 出版社不詳.
- 上野善道 (2003). 「アクセントの体系と仕組み」. 『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』. 東京: 朝倉書店, pp. 61–84.
- 上野善道 (2002). 「アクセント記述の方法」. 『現代日本語講座 第 3 巻 発音』. 東京: 明治書院, pp. 163–186.

<sup>\*10</sup> ナニュータベルン? 「何を食べますか。」に対する返答として\*スシタベルン「寿司を食べます。」が不適格であるという事実から、おそらく動詞の相(アスペクト)が関与しているのではないかと推察される。